

館蔵資料紹介No.21

図録日本医事文化史料集成

正村 静子

「図録日本医事文化史料集成」 全5巻 三一書房 医学部分館4階に配架。監修：小川鼎三 全巻編集：宗田 一。昭和2年（1927）に誕生した日本医史学会が創立50周年を記念して全国に散在する医事文化の史料を集大成した図録を作った。従来の出版物にはこれほど膨大な史料を図版にした類書はなく、編集するにあたり史料として著名なものでも既に別の出版物で紹介されているものは特に重要なもののみを収録し、未発表の史料をできるだけ多く収録することを心がけたとある。1977年から1978年にかけて発行された。各巻の収録史料は次のとおりである。第1巻（樋口誠太郎編集）：考古資料関係・絵巻物・新撰病草紙、第2巻（酒井シヅ編集）：解剖図・手術図、第3巻（谷津三雄・大塚恭男編集）：医療機器・薬、第4巻（杉田暉道・長門谷洋治編集）：祭祀・信仰・はしか絵・養生・軍事医療・労働衛生・文芸医事、第5巻（矢部一郎・蒲原 宏編集）：人物・各県の医史・医跡。B4の大判で各巻300ページ前後、実に多くの興味をひかれる図や写真が掲載されている中で各巻から1ないし2枚を選んで以下に示す。



図1：第1巻15ページ「変形した膝関節」

これは第1巻の初部に出てくる岡山県彦崎貝塚出土の変形した膝関節実物の写真である。大腿骨遠位端と膝蓋骨後面には沢山の平行な溝ができています。変形性関節症を病んでいたであろうに厳しい筋肉労働で絶えず関節を動かさねばならず、軟骨がなくなって関節面がすり減っている様子も生々しい。このほかにも日本の縄文人の歯を見ると砂混じりの食物をとり続けた跡がしのばれるし、上腕骨のたくましきからは大腿骨の場合と同様に過酷な労働が思われる。成人の骨から推定して縄文人の寿命は30歳位であったという。

（この部分は上記の段落の重複を避けるため省略されています）



図2：第1巻199ページ「閑叟公於午前世嗣子淳一郎君種痘之図」

佐賀藩主鍋島直正（閑叟）が嫡子淳一郎に種痘を受けさせる場面を見守る図。立っているのが鍋島直正。右から二人目の片肌脱ぎの若者は藩医の長子・永叔で、永叔に1849年外国から取り寄せたかさぶたで種痘を施して成功したので、そのかさぶたから淳一郎に植えさせているところである。



図3：第2巻25ページ 頓医抄の五臓図

日本で初めて人体内部を詳しく書いたものは鎌倉時代の僧医、梶原性全著の「頓医抄」（1302）である。これは中国・宋時代の医師・楊介による解剖図「存真環中図」（1113）を転写したといわれる。これらの図と共に五臓（心・肝・脾・肺・腎）六腑（胃・大腸・小腸・胆・膀胱・三焦）および十二経絡の概念が輸入され、永く信じられた。本邦最初の人体解剖は

山脇東洋により1754年京都でなされ、5年後に実地解剖書「蔵志」が世に出たが、山脇東洋を解剖に駆り立てたのは中国伝統医学の五臓六腑図に対して抱いた疑問である。既に西洋解剖書を見て、その精緻な図に感じた彼の「蔵志」の図も写実性にはなお問題があった。しかし、ヨーロッパでも中世暗黒期の解剖図は「頓医抄」の図にさらに劣る。因みに江戸時代の解剖は刑屍で、殆どの場合1日のうちに、しかも日没までに終えなければならなかった。

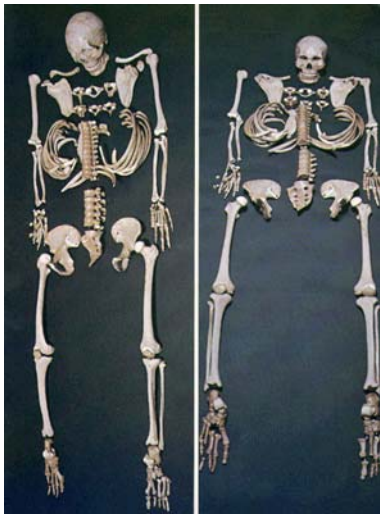


図4：第2巻142ページ。星野木骨
1791年広島に星野良悦が刑屍2体を解剖し1体から骨格標本を作った。これを工人原田孝次に模刻させたもの。作製には約300日を要したとある。1798年江戸へ行き、杉田玄白、大槻玄沢に供覧して賞賛を博したというが、木製であるのに写真で見て実物と見まごう出来である。彼らはこの標本を身幹儀と呼んだ。2年の後、星野良悦は別に1組の木骨を同じ工人に作らせて幕府に献上した。

たというが、木製であるのに写真で見て実物と見まごう出来である。彼らはこの標本を身幹儀と呼んだ。2年の後、星野良悦は別に1組の木骨を同じ工人に作らせて幕府に献上した。



図5：第3巻24ページ。平賀源内作エレキテル通信総合博物館蔵静電式医用電気具（摩擦起電機）。
ハンドルを回して筐の中の瓶にたくわえ、筐上部に突出した銅線から放電し治療者に帯電させた。「諸痛のある病人の痛所より火をとる器なり」と文献にある。平賀源内は長崎で破損したエレキテルを貰い、1776年江戸で修理・復元した。

た。平賀源内はその後10数個のエレキテルをつくった。現在は2個残っている。上の図が外観で、下の図は蓋をあけて内部を見せている。治療中の絵図が第3巻25ページにある。高さ28.2センチ、縦25.8センチ、横45.8センチの木製箱。



図6：第3巻76ページ。足利義政所持と伝える眼鏡とそのケース。折りたたみ式フレーム

は白象牙製。ケースも同質の象牙。老眼鏡らしい。レンズはガラス製で直径2.6センチの正円

形とかなり小型である。京都市紫野大徳寺大仙院の所蔵。現存する我が国最古の眼鏡といわれる。第3巻77ページには徳川家康所持と伝えられる白鼈甲フレームの無関節式鼻眼鏡（オランダ眼鏡）も見られる。

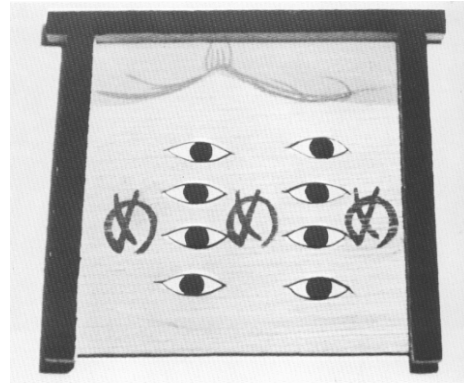


図7：第4巻94ページ
「こぶ観音」
群馬県邑楽郡邑楽町石内のコブ観音内薬師堂に奉納された目の絵馬。

「やんめ」といわれたトラホーム類似の流行性眼病の治癒祈願のためのもの。病気快癒祈願のための寺院関係の資料が多く紹介されている中で目薬とともに奉納される向かい目の絵馬は今も盛んで、絵馬に書かれた住所を見ると広い地域から人々が集うことが分かるという。



図8：第5巻253ページ
「ありし日の江馬蘭学塾」の写真。
岐阜県の医跡とし

ては「江馬蘭学塾」の写真が紹介されている。岐阜県における西洋医学は西濃で始まり美濃で栄えた。岐阜県の生んだ3人の西洋医学の大家として江馬蘭齋・小森玄良（京都で活躍）・坪井信道（江戸で活躍）が挙げられている。岐阜県の医学の発達と教育とにその92年の生涯を捧げた江馬蘭齋は杉田玄白・前野良沢に学び1795年、大垣に蘭学塾好蘭堂を開いた。ここでの教育と治療のかたわら蘭齋が考案した蒸気風呂は昭和に至っても理学療法として行われた。蘭学塾好蘭堂はその後4代にわたって教育基本と共に伝えられ、明治20年頃迄続いた。このような私塾の存在は本邦では例をみないという。

（しょうむら しずこ：岐阜大学医学部教授）